

『心して行けさらばよ』と

いひて別れて見送りて

母はかくこそ思ひけれ

『あの子生れし年の夏

今日のごとくに船出して

行へ知れずの身となりし

あの子の父に似たるかな

日笠かぶれるあの姿』

小さき魚

日ごろへだてぬ

したしき友に

星かげあはき

ともに涼しき

むかふの岸に

波のまに／＼

す み

まなび舎の

誘はれて

夕暮を

小川べり

ちよろ／＼と

群れてゐる

れ

つみなき魚を

おどろかす

青葉のかぜも

おかしけり

徒然草を讀みて

あ ふ ひ

並岡の法師のつれ／＼の心やりに書きつけいん、徒然草こそ、いとたふときふみなれ。そのはじめは、人に見せんとての料にはあらざりけめど、學力ある人の、世を憤り志を述べたるにて、文さへいと妙なれば、おのづから世にもはやされ、後の世の人、つれ／＼なるをり、あるはさらぬをりにも讀みあはひてめで來つるなり。隨筆物としては枕草子につき、註釋の多きことは、源氏物語につぐといふ。

此法師は、大織冠より十九世の後、吉田兼顯の子にして、はじめは兼好とて後宇多院北面の士にして、左兵衛佐なりしが、院崩御の後、やがて還世して兼好法師と呼べり。歌の口つきいとめでたく、二條家の門弟にて四天王と呼ばれたりとぞ。出家して後は、並岡にも住み、また伊賀國見山にもかくれけるとかや。家集に、並岡に無常所まうけてかたはらに櫻をうゑさせて「ちきりおく花とならひの岡の邊にあはいくよの春をすくさん」と、あるを見れば、庵のほとりに櫻などうゑてたのしまれたるなるべし。後村上天皇正平五年に、年六十八にて身まかられたるよし諸書に見ゆ。